

特集 最近多発している病害虫の防除技術

1 多発生がつづくイネの斑点米カメムシ類

ねらい

2000年の斑点米カメムシ類は、全国的に大発生となった。本県では1998年からカメムシ類の発生が急増し（図1）、斑点米の発生による品質低下が問題となった。1999年は7月に注意報を、2000年は7月に注意報、8月に警報を発表し、水田周辺の除草と防除を呼びかけた。

今年も多くなると推測され、今後の発生動向に注意が必要である。

内容

(1) 食糧事務所の調査によると、水稻うるち米の着色粒（斑点米）による等級格付け低下は、1997年産1%、1998年産3%で問題とならなかったが、1999年産は14%と急増したが、2000年産は6%に減少した。その要因は雑草の除草と防除の呼びかけによるものと考えられる。また、着色粒（斑点米）の発生はカメムシ類の発生と同様に県下全域に広がっている。

(2) 毎年7月のイネ発生予察巡回調査において、1997年までの斑点米カメムシ類の発生地点率は10%以下であったが、1998年には20%を超え、1999年は26%、2000年には40%に達した（図1）。1999年までの5年間の平均値と比較し、約3倍の発生となっている。カメムシ類の発生の多い地域は県下へと広がっている。

(3) 2000年8月の巡回調査から、発生する種類を見ると、クモヘリカメムシが最も多く、全体の33%を

占め、次いでアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシの順である（図2）。

1975年頃、但馬・丹波の早期イネを中心に斑点米被害が問題となった。その当時の優占種はクモヘリカメムシが主で、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなどであるが、最近では、これらに加えて、カスミカメムシ類の発生が増加している。

このように、斑点米カメムシ類が多発した要因として、畦畔・雑草地・休耕地の除草作業が手抜きされ、水田内でもカメムシが好むヒエ類が目立つようになったことや出穂後の防除の減少が考えられる。

本県では1999年に「カメムシ対策会議」を結成し、除草や防除実施を呼びかけ、農家向けの広報活動を取り組んだ結果、2000年から斑点米の被害を減少させることができた。斑点米による検査等級格付け低下は、依然として高い水準にあるため、引き続き警戒が必要である。

普及上の注意事項

防除対策として、畦畔・雑草地・休耕地の除草を定期的に行い、イネ科雑草を繁茂させないことが重要である。除草についてはイネの出穂10日前までに完了させ、水田への飛来、移動を少なくすることである。水田へ侵入したカメムシ類の防除対策としては、発生予察情報を活用し、穂揃期から糊熟期に地域での一斉防除を行うことが効果的である。

藤富 正昭（病害虫防除所）

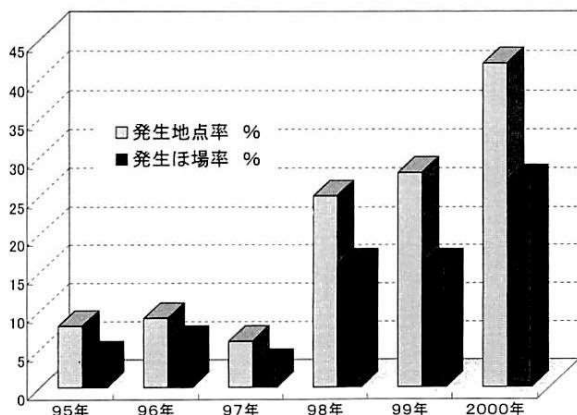


図1 巡回調査における斑点米カメムシ類の発生状況（7月中旬）

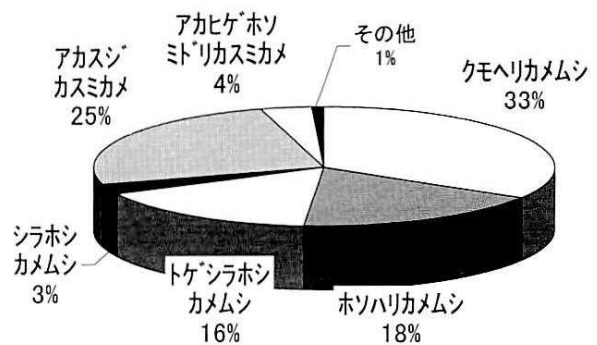


図2 水田における斑点米カメムシの発生種（2000年8月）